

例会記事

四月例会 昭和六十年四月二十七日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一、(医家追薦) 没後一〇〇年にあたる人びと

・森沢園の生涯とその業績

・清水郁太郎について

小曾戸 洋

石原 力

一、『神宮醫方史』こぼれ話

久志本 常孝

五月例会 第八十六回日本医史学会総会に替えました。

六月例会 昭和六十年六月二十二日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一、真言密教とタントラ

杉田 暉道

一、援進医会と「医談」

富士川 英郎

七月例会 昭和六十年七月二十七日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

一、アーユルヴェーダにおける予防歯科の記述

—南海寄歸内法伝の記述と比較して— 山下 勤

法華経におけるアーユルヴェーダの記述—特に化城喻品にお

ける— 中田 直道

一、日本医学校と女性医師の先駆者たち—日之出會の人びと

横川 弘蔵

例会講演要旨

『神宮醫方史』こぼれ話

久志本 常孝

この二月に私は、それまで二十余年にわたってぼつぼつ集めた史料をもとに、表題のような一書を世に出した。そこにいたる経緯など、若干の事柄について述べよう。

一、題名のゆえん

結論からいうと、神宮医方とは、世にいう久志本流医術の別称と考えてよい。

久志本流医術の始祖常任は、平安時代の伊勢神宮の神宮であったが、同時に彼は大変医術にも堪能であった。

彼の兄常親(外宮の長官)が眩暈の病を患ったとき、京都から医師を招いたが、病は平癒したものの、薬の中に混じていた鹿丸のため、常親は百日の穢となり、神務が著しく妨げられた。

そこで常任は不浄な薬種や、神宮禁忌の薬種を除いた薬方で行う医術の体系を考案した。

このことは白河院の大きに嘉せられるところとなり、永保年中(一一〇八一—一一〇八三)勅宣により、永代神宮の医官に定められた。これを世に神宮医と称し、そのような固有名詞ができたのである。

時代は下がって室町時代に、常光という優れた神宮医があらわれ、その名は勢、尾、信の三州に轟いた。彼は名声を慕ってく

る入門希望者を断わり続けたが、医術修行のため伊勢神宮に参籠したという片切左近丞源頼為という人物の乞いを受け容れ、天文三年（一五三三）七月十一日、『管蠡備急方』と称する三巻の書物を記し与えた。この片切左近なる人物は、豊臣秀吉の忠臣、片桐且元の高祖父である点面白い。同年常光はさらに『管蠡草灸診抄』一卷を著わした。

常光の子に常辰があつたが、彼は父に勝るとも劣らぬ学者であつた。相当若い時から識田信秀ならびに信長の客分となつていた。

彼は多くの医書、神書を著わしたが、それらのうち、『醫學色葉』一卷、天文二十三年（一五五四）、『家傳通外』二巻、永祿三年（一五六〇）、『一流大事法』一卷および『五急活法』一卷、共に永祿十年（一五六七）、『山野集』二巻、天正十三年（一五八五）、『奥義集』二巻（年代不詳）、『葉林撰葉集』二巻（年代不詳）および『服餌要集』一卷（年代不詳）の八著は、さきの常光の二著と合わせて、神宮醫方十書といい、その後の久志本流医術の典籍となつたのである。

このような事情から、私は久志本流医術史という代りに神宮醫方史という言葉を使ったのである。

二、研究の動機

私の父は自家の歴史には殆ど興味はなかつたようである。そして昭和四十五年四月十三日、八十歳で世を去つたのであるが、昭和三十五年の暮、旧幕時代に私の家の知行地であつた勝田（鍛冶田）村とは何処であらうかといひ出した。

色々調べた結果、それは東横線の綱島駅の一里程北にある勝田町であらうとの推定をつけた。

昭和三十六年二月、所用で横浜に出張した帰路、好天氣に誘われ、何とはなしに綱島駅で下車した。

駅前のハイヤーをオーダーして勝田に向つたが、今日は勝田団地の港北ニュータウンの開発で道路も良くなつてゐるが、当時は田圃の畔道を伝うようにして車は勝田に辿り着いた。

ここには最乗寺という寺があり、そこに、当地で三百石の知行を拝領した常範と、その二男常衡の墓があることは承知してゐた。

確かに寺はあるが、寺名を示す何の標識もなく、夕暮のせいもあつて附近に人影さえ見られない。弱つてゐると、境内から杖をつき、白髪に白髭をたくわえた一人の老人が現われた。彼は関篤治氏（現在は故人）で、小田原北條時代に当地の代官であつた家の末裔であつた。そして私が身分を明らかにすると、当寺が最乗寺であること、常範、常衡の墓が現存することを語ってくれた。さらに、近く親鸞上人の七百五十回忌法要があるので、寺のあちこちを修繕したとき須彌壇の下から、常衡の位牌が発見され、これも相当傷んでいたが、最近修理が済んだところであると語ってくれた。日もとつぷり暮れたので、老人に名刺だけを手渡しして、その日は辞去した。

数日後、住職から、法要当日私の出席を促す案内に接し、参列した。二月二十九日のことである。そして、寺の裏山の生い茂つた枯草の中に転がしてあると言つた方が當つてゐる状態の常範の

墓に詣ることができた。

思えば、私の家の記録では、祖父の長兄の常德が、嘉永二年（一八四九）四月一日に墓参したのが最後で、その後実に百二十年もの間放置されていたのである。

同年十一月、名古屋での日本医学総会に出席した機会に、伊勢を訪れ、当流の中興の祖といふべき常光の墓に詣でることにした。

私は曾祖父常貫の記行文を頼りに尋ねていった。そこには次のように記されている、

「松尾山は久志本村の南に在り東南は楠部貝吹山西北は黒瀬村神田村久志本村に続く山上松樹多し池二ヶ所山中に観音堂あり堂三間四面本尊十一面観音毎年正五九月初午の日参詣群集すと堂後の傍に常光之墓碑在僅に存す 予往年弘化二乙酉秋神役のため勢州へ往し時松尾山に登り詣常光墓五輪の小塔僅に存文字漫滅不分明道傍の藪際に在香花の備ふべきことなし往来野人に蹂躪せられ或は豺狼に穢されんも計りかたし嗚呼往昔巨室に居り錦褥に坐し滋味を食されしも今此の如く敗壞す懐旧惨胆に堪へず涙袂を沾す豈所謂狸蠅蝸蝓の歎なきをえんや可恐畏なり歸府の節修補を加ふべく同姓常信に囑せるも未果遺憾甚矣 松尾嶺は従来常任時代より伝来の旧領同姓常信家の持地也 中古故有て山田市人造某所持すと云う 右廟所貳間四面は今除き省きし由然れとも四囲の垣埒無し遠境とは申なから其家筋の怠惰恥く惶へく慎へきにあらずや」と。

松尾山に登ると、正に観音堂は秋の碧空にそそり立っていた。

堂を守っておられる木堂珠樹氏に伺ったところ、ほんの僅かな過去において、市営の野球場建設のため、久志本家の墓地はすべて整地されてしまった由であった。

曾祖父の憂いは、まさに私の目前は実現していたのだ。私はこのような痛恨な気持を味わったことはない。それは曾て私が自らの嬰兒を失った時のものに勝るとも劣らぬものであった。同時に心なき所為により忘却されてゆく父祖達の功の跡を、自力の及ぶかぎり後世へ伝え残すべき宿命的ともいえる責務を感じたのである。

三、著述に向かつて

昭和三十六年、当時東京慈恵会医科大学で医学史を講じておられた故石原明博士と前述したような話をする機会を持った。そのとき博士は私に、医史学会で報告することを奨めて下さった。浅学のうえ、持ち合わせの史料も乏しかったが、先輩の教えを乞う積りで、二度ばかり例会で話をさせていただいた。

しかし、現実には何分三十三代、九百年の、然も神宮、医官、武官という身分の重疊を許された特異な家系のことだけに、史料の乏しさを痛感し、このような発表形式を避け、以後多忙の間に史料の蒐集のみを心懸け、漸く一書をまとめられる域に達したと思えるようになったのである。

四、神宮醫方の特徴

(一) 伊勢の神宮家のために支えられ、三十三代、約九百年にわたり、殆ど父子相伝で一流をまもりつづけた。

(二) 医官と神官、後世では医官と武官と神官の如く、重い身

分の重量を許されていた。

(三) 伊勢神宮の権禰宜の極位は正四位上であったから、医官としては最も高い官位を得たものが多い。

(四) 常頭は徳川家康の扶持を受けた最初の医師である。

(五) 前項の結果、江戸時代には三河譜代直参の格を誇った。

(六) 武家諸法度の将外の扱いをうけた。

(七) 徳川幕府からうけた祿高は最高で、左京家は二千石、式部家は三百石、内蔵允家も三百石で、三家合わせて二千六百石であった。

(八) 医官ではあるが、もともと武官であるため、任官の場合、法印、法眼のような僧位を受けることはなく、従五位下諸太夫に任官した。

五、心残りなこと

昭和三十九年九月十一日の例会で講演した折、故石原明博士から次のような追加発言をいただいた。

「享祿二年（一五二九）、常辰（二十歳位）は『頓醫抄』五十巻を書写した。同書は現在内閣文庫に蔵されているので、もし私共の系図等に記載がないなら、是非追記する価値がある」とのことであった。

同文庫を調べたが、確かに五十巻の『頓醫抄』は存在し、室町写本とまでは判明したが、常辰の写本なりや否やが断定できずに終ったことである。

日本医学校と女性医師の先駆者たち

——日之出會の人びと

横川 弘 蔵

一、女性医師養成機関としての日本医学校

私立日本医学校は、明治三十六年八月の済生学舎廃校により同年九月設立された旧済生学舎同窓医学講習会〔石川清志（一八五四～一九一四）主宰 男子のみ〕から分かれた医学研究会〔川上元治郎（一八六四～一九一五）主宰 桂秀馬（一八六一～一九一一）会長 男子のみ〕を機部檢三（一八七二～一九四九）が引継ぎ明治三十七年四月十五日 神田区美土代町二～一東京医師クラブ講堂で開校〔校長 山根正次（一八五七～一九二五）〕した。一方、石川清志の同窓医学講習会は、明治三十七年三月 私立東京医学校と改称し、同年四月十五日日本郷区駒込千駄木五九の校舎で、授業を開始した。両校共、男女共学で、授業は、前期（基礎）二年、後期（臨床）二年の正科の他、臨床講習会を併設、「日本医学」〔東洋医事新報〕（東京医学校）を機関誌とした。明治四十四年四月 両校は合併、私立日本医学校となった。以上日本医学校、東京医学校（創立時併合した女子医学研修所を含む）に於ける女子医学教育は、明治三十四年～四十五年の十二年間で、済生学舎の十六年を加えると二十八年に及ぶ。この間医師養成機関に学んだ女子生徒の正確な人数を算出することは難しいが、済生学舎に数百名（推定）、私立東京医学校に五十余名、私立日本医学校